昭和文学論考

小川和佑

三交社

著者紹介

小川和佑（おがわ　かずすけ）

1930年　東京生まれ。明治大学卒業。

昭和女子大学助教授・明治大学兼任講師。

主要著書　『「四季」とその詩人』（有精堂）『三好達治研究』（国文社）『優しき歌』（社会思想社）『立原道造論』（五月書房）『三島由紀夫少年詩』（潮出版社）『堀辰雄』（三交社）ほか。

左の「カラスのマーク」を葉書に貼って小社あてにお送り下さい。粗品をお贈りいたします。

昭和文学論考
© Kazusuke Ogawa
Printed in Japan 0021-00709-2759

著者　小川和佑
発行者　戸田寛
印刷　(有)荘司印刷
(有)村松印刷
同紙　朝日紙業株式会社
製本　(有)イマキ製本所

発行者　株式会社　三交社
東京都千代田区神田神保町2—20
〒101　TEL　(03) 262—5757
振替東京

落丁・乱丁本はお取替いたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昭和文学論考目次

第一章　立原道造論……七
立原道造の未発表書簡―反『風立ちぬ』の世界……八
『優しき歌』の成立と構想……三九
立原道造の晩年をめぐって……五四
第二章　昭和文学への考察……六一
堀辰雄における少女志向……六二
林で書いた詩・詩人伊藤整―文学的出発『冬夜』『雪明りの路』―……六九
坂口安吾のイデル―「木々の精・谷の精」……八六
主知主義文学の系譜―中里恒子「マリアンヌ」考……九六
草野心平と「歴程」……一〇六
第三章　戦後小説・戦後詩……一一七

目　次

詩と小説の接点―井上靖の文学……一一八
小林秀雄と江藤淳……一二九
革命の神話―黒田喜夫『不安と遊撃』……一三六
苛烈な夢の果てに―高橋和巳論……一四三
白石かずこ・その文学と思想……一五七
『死の影の下に』―その史的意味……一七六
中村真一郎論……一八〇
あとがき……一九一

昭和文学論考

第一章　立原道造論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

立原道造の未発表書簡

――反『風立ちぬ』の世界

I

昭和十四年夏、信濃追分駅で偶然、中村真一郎の前に姿を見せた後、水戸部アサイ氏は、詩人の遺友、「四季」の同人の前から全く消息を絶って今日に至っている。

例えば、昭和二十一年五月、「四季」再刊を準備していた堀辰雄も、野村英夫に宛てた書簡の中で「……水戸部さんのノオトなど、どうしたのだらう。僕も病気だつたので何も知らずにゐた。……」とあるように戦後三回企画された立原道造全集刊行の際にも、その消息は不明であった。

しかし、昭和四十五年、水戸部アサイ氏が栃木県立栃木高等女学校（現、県立栃木女子高校）の卒業生であることが判明。立原道造没後現在に至るまでの消息が明らかになった。この間の事情については、拙稿「立原道造・晩年の愛と死」（「四季派研究」第四号、昭四八・六）に詳述した通りである。

今回新たに発見された十五通（内四通のみ山本版全集以後の諸全集に収録）は、この立原の婚約者と目されていた水戸部アサイ氏宛に書かれた立原の書簡の全てである。

この氏の消息と書簡の発見によって、従来の立原における水戸部氏をめぐる臆説二つが訂正されることとなった。しかし、これに関しては多くを触れるには及ぶまい。

さて、この新資料書簡は右にも述べたごとく全十五通、うち四通は山本版全集第三巻の書簡集を編纂する際に収録されたが、――但しそのうち一通は前後を誤られ二通として収録、その誤謬は原文を確認できぬまま、最新の角川六

巻本全集にも踏襲されている。――主要な十一通は今回（昭和四九・三現在）初めて公開されるものである。その間、もはや三十六年の歳月が経過している。

水戸部氏が書簡公開を決意したのは、ここ数年来、基督者としての伝道生活に打ち込み、ようやく過去の精神的な事象に整理がついたことに因る。この間立原道造没後、一切立原との記憶を消去することにつとめた三十六年であったという。

先ず、書簡十五通は後述の拙論のごとく、封書十四、はがき一、封書中には親展・速達各一通であり、それらを通読することによって、第一に立原晩年の文学的意図が明らかにされていることであり、それは主として詩集『優しき歌』と「火山灰ノート」「盛岡ノート」「長崎ノート」との関連を明確に示すものであり、第二には、立原の次期の文学への可能性を包括しながら、極めて私的次元における立原の精神の軌跡を示すことになる。立原道造の文学研究の上ではこの二点のどちらか一方に、より高い価値を付与するということは不可能であろう。

II

ここで『優しき歌』および、『風立ちぬ』的世界への訣別に関わる重要な書簡は昭和十三年八月十、十七、二十三日、九月一、四日付の五通の書簡である。いわば、この五通の書簡は八月十二日の記載で中断されている「火山灰ノート」の間隙を埋めるものであり、同ノートの持続として書かれたものであると考えることは可能である。第一信は同ノートの八月二日以降の記載に重複しながら、この年の村ぐらしへの決意が見られる。

この年の村ぐらしは、いわば新しい愛の再建であった。それは立原の私生活の次元でのものというよりも、むしろ、『優しき歌』という新詩集の完成に賭ける夏であったと推定できる。つまり、それは反『風立ちぬ』的世界が想定されていたといってよい。立原はこのために、『優しき歌』を構成する詩稿やノートを携えていったと思われる。この書簡から、『優しき歌』の成立期が、この年の信濃追分滞在期間に完結したとほぼ推量し得るがこの項目については機会を改めて詳細に論じたい。

この最後の村ぐらしは表面的には病気療養のための休職であったが、立原は宿痾に対する治療は極めて不熱心であ

った。むしろ、職場からの解放感が立原をひどく陽気にさせていたかの観さえある。

立原がこの村ぐらしで望んでいたものは、「さびしくてひとりきりで、みちたりた、たのしい日々……」（書簡三）であった。そうした孤独の日で静かに『優しき歌』を完成させることにあったらしい。『優しき歌』の覚書三章によれば、水戸部アサイとの邂逅は、『優しき歌』の構想に決定的な変化をもたらしたと考えてよいであろう。

第四信の九月一日の書簡は新しい旅立ちの決意が述べられている。第三信の誘いにあるように彼女は二十八日（日）に追分の立原を訪問している。一日発信の第四信は彼女の帰京後に追いかけるようにして書いたものであろう。

僕には　ひとつの魂が課せられてゐる。どこか無限の、とほくへ行かねばならない魂が、愛するものにすら別離を告げて――そして　それに耐へて。だが、その魂は決して愛する者を裏切ることには耐へない。別離が一層に大きな愛だといふことを、そして　僕の漂泊の意味。おまへにも　また、これに耐へよと僕はいふ。僕たちの愛が、いまひとつの大きな別離であるゆゑに。

この一節は立原の新たな決意である。と同時に、信濃追分、盛岡、奈良、京都、松江より長崎に至る長途の旅行の重要なモチーフである。

「どこか無限の、とほくへ行かねばならない魂」という一節に、立原の黝い死の予感を窺うことができる。この死の予感は、第四信の「別離」という言葉を二重の意味で深いものにしている。それを立原の青年らしい感傷と潔癖といってしまえばそれまでであるが、次第に悪化していく自己の病状への自覚は、一方で死の誘惑に急速に傾斜していきながらも、他方で、それに抗して彼は生きねばならぬ時間が必要であった。後述の堀辰雄への書簡（569―角川六巻本全集、以下同）と、小山正孝への書簡（568）にはその二つの間に揺れ動く立原の精神を見ることができる。

この時点での「別離」は詩集『萱草に寄す』に見られる「別離」と同質のものではあるまい。一人の少女との「別離」による愛の自己確認、もしくは自己検証を通じて、生への実感の把握として、逆説的にいかにも果されねばならぬ決意による行為であった。

過去と訣別することによって新しい自己の創造を求め、現在に訣別することによって、そこにより充実した生を持続させる。「火山灰ノート」「盛岡ノート」「長崎ノート」等の三冊のノートと、今回の十五通の書簡は、この「別離」と「漂泊」をモチーフとして書き続けられたものである。

この「別離」の思想と行為こそ、立原道造の最晩年の文学的意図に、極めて重要な一語であり、可能だったならば形成されたはずの次期の文学への架橋となるものであった。

この第四信は大型スケッチブックの一葉両面に青色鉛筆で本文を、黄緑色鉛筆でノンブルを書いたもので、十五通中最も美しい書簡の一つであり、恣意な推量が許されるならば、このスケッチブックが、あるいは中村真一郎氏が油屋滞在中に詩人から見せられたというスケッチブックに書かれた詩稿と同じものの一葉ではなかったであろうか。

続く第五信も極めて文学的なものである。軽井沢よりの帰京の知らせであるが、単にそれだけではない。

僕はおまへをここに　つながうとする、なぜ僕らは愛しあふのかと……この（なぜ？）には運命を愛する（なぜ？）とおなじように生きているかぎり答えられない、しかし美しい黄昏には僕らはこれの答にたいへん近い　おまへは　とほくにゐる僕はおまへの黄昏の雲や空や光を、ここでのそれを等しいものとして美しいものだとかんじる。……

これは詩的散文というべきであろう。『優しき歌』のV「また落葉林で」と全ての点で重層化する。従って「そしていま　おまへは告げてよこす／私らは別離に耐へることが出来る　と」の詩句に見られる「別離」は明らかに新しい生の再生のための別離であり、「しかしすでに　離れはじめた　ふたつの眼ざし……」は、既にこの「別離」を前にして、「別離」の意味を深く問いつつある情感を意味しようか。

これらの書簡を検討して見る時、森公児氏によって発見された新資料「優しき歌――旅のをはりに」（昭四二・一〇「文学」掲載）がその解題のように必ずしも盛岡より帰京後とは言い得ず、書簡四、五に拠れば、これは八月二十八日の水戸部アサイの追分訪問時、もしくは軽井沢より帰京の直後の心情が詩のモチーフとなり得ることも充分にあ

ろうか。

水戸部氏の『優しき歌』詩稿の存在の記憶とともに、中村真一郎氏説による現行『優しき歌』の構成は、決定的に疑義の余地はなくなったといえよう。

Ⅲ

次に私的生活の次元で、二人にとって石本建築事務所の勤務は必ずしも快適でなかったようだ。水戸部氏の出現以前からこの職場が立原にとって次第に息苦しいものになって来ている時点で、水戸部氏が新しい愛の対象として、立原の前に出現する。二人が急速に親しい関係になっていく過程で同僚の武基雄氏以外には立原らを取りまく空気は必ずしも厚意的とばかりいえなかったのではないか。第三信にそうした苦痛が語られていよう。その苦痛の要因の一面は立原自身の内面にあるとも考えられる。しかし、この点については臆測を避けて、直接水戸部氏、武氏の回想を聴くべきであろうが、立原にとっての水戸部アサイは、それ以前の関鮎子、山根（旧姓今井）治枝、横田ケイ子らの少女と同等の比重では考えられない。これらの少女と立原の私的生活における関連については、既に安田保雄氏がその著書『比較文学論考・続篇』（昭四九・六、学友社刊）収録の立原道造に関する論考のなかで、非常に示唆に富んだ説を発表しておられるが、これに中学時代の金田久子を加えても、これら四人の少女たちは、立原のいわば文学的、精神的気圏の少女たちであっても、それは生活的、日常的次元の少女たちではない。

今回の、未発表書簡十五通を仔細に読むかぎりでは、立原道造における水戸部アサイというこの少女は、その私生活、または「私性」に深く関わることで、立原晩年の精神的なものに占められる比重は従来、諸説で論じられているものよりも遥かに大きな部分を与えねばなるまい。各書簡末尾のなにげない追而書きにしばしば生活的な実感というものがある。

浦和別所沼の風信子荘（ヒヤシンス・ハウス）は、この水戸部アサイ氏との新しい生活を想定して、設計されたものであることが解る。例えば、

……だが　あなたひとり　いやな　おもひをしてゐるなら　心苦しいから　僕も　何とか　かんがへよう　出来たら秋まで　街のなかに　がまんしてゐて下さい……
ゆふべも　おまへは　おまへの家のひとたちと僕とのあひだに坐つて苦しさうな顔をしてゐた……（第二信）

……スエーターの寸法　どういう風に　はかつたらいいのか　僕には　わからない　（等七信追而）

というような一節にそれはうかがわれる。

そうした立原の精神の内面に強い波動を起した情感は、勿論、詩集『優しき歌』や連作「風に寄せて」のモチーフに深く関わるものであろう。愛への逡巡と懐疑を経て、遂に愛の浄福に至るという『優しき歌』の主題は、そのまま、立原の昭和十三年春から夏にかけての心境と一致するが、そしてそれはあくまでも立原の私的な体験の再現ではないけれども、その再生した新しい愛、その愛の浄福を全きものにするためには、立原にとっては二つの課題を果さねばならなかった。

そのひとつは、自己の文学の変革であり、過去との一切の訣別であり、新しい創造の確立であった。そのためには、彼の信濃の風土を捨てることでの北方への旅立ちがあった。軽井沢から盛岡へ、そして東京。奈良、京都、松江を経て長崎へという立原にとってその生涯ではじめての長途の旅行は、立原自身の精神の再生のための、いわばゲーテ的「イタリア紀行」であった。そして、この旅行のもうひとつの重要な意味は、堀辰雄の立原追悼の一文「木の十字架」（昭一五・七「知性」）の一節にあるごとく「恋しつつ、しかも恋人から別離して、それに身を震はせつつ堪へる」ことで、この愛が真実としていかに深いかを自己検証することにあった。十五通の書簡はその立原にとっては例外的な自己告白である。今回の新資料の重要性のこれは第一のものであろう。

立原にとってのこの「イタリア紀行」的体験の発想は、そのエッセイ「風立ちぬ」の構想成立の時点にまで遡行可能であろう。即ち、昭和十三年四月中、下旬あたりにそれは既に萌芽し、次第に強固な思想にまで成長していく。その過程での水戸部アサイとの邂逅が、反「風立ちぬ」志向に深く影響を及ぼしたであろうという仮説は充分に立て得

る。この視点によれば、水戸部アサイという少女の存在が立原の「私性」に他の四人の少女よりも深く関わることは明らかであろう。

盛岡滞在は立原の「風立ちぬ」の終章（Ⅵ・Ⅶ　補遺）を完成させるために必要な時間であった。

Ⅳ

水戸部アサイへの第五信、そして信濃追分よりの最後の便りに立原は次のように書く。

……けふは夏の日のをはり。もう秋の日のはじめ。大きな身ぶりを描いて、不思議なひびきが空を過ぎる。しかし、僕らが明日を知らないこと！　ただ出発だ。どこへ？　だれのために？　……僕に信じられないくらゐの不思議な美しい夏。それは、もうふたたびくりかへしも出来なければ語ることも出来ないだらう。ただ出発！
どこへ？　おまへへ！
一層ふかく「僕ら」へ！

（第五信）

この長途の旅行の目的を詩友矢山哲治に「身心改善」の旅であるとその書簡（528）でいっている。そして、その旅は形式と目的を持つ「漂泊自体」の虚構を排して、純粋な決意に集約される。

しかし、この深い決意にもかかわらず、盛岡行は不毛の時間であった。

純粋な孤独と静謐と秋のなかで、静かに熟成するはずの時間は遂に成就しない。成就を錯覚させたのは、盛岡に到着してほんの数日であった。ここでも立原は現実に裏切られている。彼が現実に裏切られることは、立原の夢想が常に現実を上廻るからであろう。それを詩的夢想といってしまえばそれまでであろうが、生涯その詩的夢想と現実との落差が、立原の詩の原点ではなかったか。

盛岡より出された第八信には特にその思いが強い。立原は盛岡の飛土と秋の光を愛し、この文学の原風景の上に築き得なかった彼の世界に深い絶望と、長崎での再建の夢を抱いて立ち去る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com